

光源氏の「孝」に対するまなざし

森 あかね

『源氏物語』では内大臣の「孝」を批判し、光源氏の「孝」を称賛する様子が繰り返し語られる。それは一見、光源氏の理想性を語る文脈として受け取られる。しかし、物語における「孝」の例という点を踏まえるならば、異なった位置づけが可能ではないだろうか。本稿は光源氏と孝の関係を起点とし、物語の中で果たす意義を明らかにすることを目的とする。

光源氏の「孝」を考える際に、継母的立場である藤壺との関係は見過ごせない。律令の規定や孝子説話、『うつほ物語』の例を見ると、継母と継子の恋愛関係は「不孝」と結びつけられており、それは天が許さない「不孝」である意識されていた。天が「孝」を判断する存在であることに加えて、人々は知識を共有していたと想定される。物語においても「薄雲」の天変は、光源氏と藤壺の関係における「さとし」であると明確に示され、光源氏の内面にある不孝は明らかにされている。これらを総合して考えた時、称賛されている光源氏の「孝」から皮肉的な機能を見出せる。「孝」は光源氏の不孝を照射し、矛盾を示すものとして位置付けられる。

このような「孝」は、孝子説話や経典で理想性を説く「孝」とは異なっている。物語独自の方法として見出すことができ、本来的な「孝」思想から離れた物語の「孝」と言えよう。

一 はじめに

「善く父母に事ふる者」を意味する「孝」⁽¹⁾は儒教の基本徳目の思想で、東アジア文化圏の広い地域において享受された。日本においても散文・韻文によってその広まりを確認することができるが、孝はやがて本来の思想としてのあり方から離れた位相も表す。平安期においては、『落窪物語』や『うつほ物語』といった物語の中で「孝」の語が提示される。しかし、物語は『孝経』や孝子説話のように儒教の教えを主眼に語っているわけではなく、「孝」本来の思想要素との結びつきは希薄である。物語展開に引き付ける方法のもとに「孝」の語は組み込まれ、いわば、物語の「孝」として機能していた⁽²⁾。

従来、孝に関する研究においては、本来的な思想性に重きが置かれる傾向にあった。物語等の文学作品においても、思想と関連づけて本文を読み解く、典拠的分析が多かった。しかし、

本来の思想や典拠元とは異なる使用例や文脈についても、孝の側面として評価していく必要がある。思想面から零れ落ちていたものも孝文化の一端として見ることで、新たな位相を見出すことが期待されるだろう。

『源氏物語』においても十例の「孝」が使用されているが、それらは本来の思想を直接語るものではない。「孝」という言葉や思想に潜む権威性・強制力を根底に据え、親子の心の距離を皮肉的に演出するものとして機能し、物語の「孝」としての様相を示している。⁽³⁾ 用例は内大臣、光源氏に集中している。その中で注目されるのは、内大臣の「孝」を批判し、光源氏の「孝」を称賛する様子が繰り返し語られる点である。一見、孝子説話のように光源氏の理想性を語る文脈とも受け取ることができようが、物語の「孝」ということを踏まえるとまた異なる見方が提示できる。この例においても、本来の「孝」思想に直接ひきつけるのではなく、物語の「孝」として新たに位置づける必要があるのではないだろうか。

そこで本稿は光源氏と孝の関係の起点とし、物語の中で果たす意義を明らかにすることを目的とする。これによって、『源氏物語』における「孝」の方法における新たな側面を見出し、物語の孝として位置付けていきたい。

二 光源氏に繋がる「孝」の用例

『源氏物語』における「孝」の用例（「孝」「不孝」「孝養」「孝ず」）全十例のうち、光源氏と関連づけられたものは五例である。この数は内大臣と関連づけられた六例に続く数となっており、「孝」の語が二人に集中して使用されていることがわかる。⁽⁴⁾ 以下、光源氏に関連づけられた「孝」の例を挙げる。

①中宮、大將殿などは、ましてすぐれてものも思しわかれず。後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら、いとあはれに世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。（賢木）九八頁⁽⁵⁾

桐壺院死後の葬儀の様を描く場面である。光源氏が儀礼を中心となつて執り行い、その様子が他の子どもたちと比較されている。悲しみでやつれた光源氏の姿が人々の胸を打つ。まさに孝子として世の人々から称賛されているという文脈である。光源氏が父を思う姿を理想化し、強調するような例である。

② 思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞ
たぐひなき

不孝なるは、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ」とのた
まへど、〔「螢」二一四頁〕

玉鬘に対して言い寄る光源氏の言葉の中で使用されている。親の思いに背く子はいない、として懸想する自身の心を、「孝」のために受け入れるべきという強引な論理を展開している。親子間ではありえない懸想を、「孝」という親子間で力のある言葉で語るといふ皮肉的な語られ方となり、二人の奇妙な関係性を引き立てるといふ効果もたらされている。

③ まめやかに仕うまつり見えたてまつれ。内大臣はこまかにしもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしくはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむものせられる。〔「野分」二七二頁〕

大宮への見舞いを報告する夕霧に対する、光源氏の言葉である。「少女」での雲井雁と夕霧の一件以来、内大臣と大宮の間

にはすれ違いが起きている。光源氏は内大臣の母親への応対に不満を示し、「孝」のあり方を非難している。その上で、心を尽くした世話をするようにと夕霧に申し付ける。

④ 「思ふやうありてものしたまへるにやあらむ。さも進みものしたまはばこそは、過ぎにし方の孝なかりし恨みも解けぬ」とのたまふ、御心おごり、こよなうねたげなり。〔「藤裏葉」四三五頁〕

内大臣の宴に招かれた夕霧は、光源氏に相談をもちかける。その際の光源氏の言葉である。③の例と同様に内大臣の大宮に対する応対の批判を含んだ言葉である。特にこの箇所では、「過ぎにし方の孝なかりし恨み」として、内大臣の行動を不孝として認定する語りに注目される。

⑤ 大宮の亡せたまへりしをいと悲しと思ひしに、致仕の大宮のさしも思ひたまへらず、ことわりの世の別れに、おほやけおほやけしき作法ばかりのことを孝じたまひしに、つらく心づきなかりしに、六条院のなかなかねむるに後の御事をも営みたまうしが、わが方さまといふ中にも、うれしう見たてまつりし、〔「夕霧」四四五頁〕

母親の死を悲しむ落葉の宮に対して、夕霧の心情が描かれる場面である。ここで夕霧に思い起こされているのは、大宮の死後における供養である。実子である内大臣が外聞ばかりを意識した供養であったことに對し、光源氏は心のこもった丁寧な供養をしたと語る。夕霧の目線から「孝」のあり方について内大臣は批判され、光源氏は理想化されている。

②の例以外は、人物の「孝」の姿勢を評価するという内容になっている。光源氏と内大臣の二人を比較する形が繰り返されているのが特徴で、内大臣における「孝」の批判・光源氏における「孝」への称賛という構図が見えてくる。光源氏の「孝」の理想が提示され、内大臣は「孝」がない、つまり不孝の人物として語られる。

しかし、本来的な「孝」の思想の中には、祖先から自分に続く縦の連なりがある。根底に存在するのは祖先を尊び、子孫を絶やさないという家の繁栄意識である。⁽⁶⁾内大臣と大宮の対立は、雲井雁を政治利用するための当てがはずれたことに起因する。つまり、内大臣の行動は一家の繁栄を追求する精神に基づくものであり、本来的な「孝」の論理からは外れていない。しかし、物語では内大臣のあり方を「孝」として語らない。本来の意味・思想と直接的には結び付けず、物語の中の「孝」の中で規定する方法がとられている。

そうであるならば、光源氏の理想化される「孝」の文脈についても、同様のことを考えなければいけないだろう。本来の思想と結びつけて、光源氏の理想性として単純に解釈するのは早計である。そもそも、光源氏の場合に考えなければいけない問題として、藤壺との密通がある。父の後である藤壺と人知れず関係を結び、子を為すという物語を大きく動かす秘密を抱えている光源氏を、はたして理想的な孝子として認識してよいのだろうか。

藤壺と光源氏の関係について、『河海抄』『紫明抄』では始皇帝の実父とされる呂不韋と太后の密通関係故事をひく。⁽⁷⁾なお、今井源衛氏が二人の関係について、「宮廷の淫蕩な密通事件は、古今東西どこの国でもありがちなことで、紫式部が呂不韋のこゝだけを思い浮かべたとはいえない⁽⁸⁾」と様々な典拠の想定を示唆しており、現在までの多くの先行研究による典拠指摘に繋がっている。郭潔梅氏は光源氏と藤壺の密通に関して、『旧唐書』に見られる晋王と父の妃である武則天の関係との重なりを指摘する。⁽⁹⁾これを基に趙秀全氏は、晋王と光源氏の密通は「不孝」にあたるものの、理想者として孝子の性格が付与されると述べる。

光源氏と藤壺の密通は、晋王の史実のように、それだけで

は完結せず、柏木と女三宮密通へと相似的に転生し、唐の史実を超えた新たな物語へと創造的な展開を見せている。

(中略) 光源氏の犯した密通は、とりもおさず父に対する「不孝」ではあるが、そのことは語られないまま、しかし一方では、光源氏は「孝」的要素を備えた人物として描かれており、ここにもまた一見不条理なようでありながら、そこを超越した物語の展開が認められるのである。¹⁰⁾

「不孝」が語られないことで、「不孝」を際立たせる物語の構図が認められている。光源氏が内包する「不孝」を物語の方法と見る示唆的な指摘であり、本稿も大筋としては趙氏の論を支持する立場である。ただし、光源氏の「不孝」を際立たせる構図が物語に与える機能について具体的に補完し、位置づけていく必要があるだろう。光源氏の物語という大きな流れの中で、この構図はどのように生かされているのだろうか。趙氏が指摘する典拠や準拠とは別の方面から密通と孝の関係を検証し、物語における「孝」の問題について考えていきたい。

実際に、前述の武則天の準拠から「孝」を捉えていくと、藤壺と完全に重なり合わないことが障害となる。武則天の場合は、周囲の反発にあうも、後宮入りを果たし晋王の皇后になる。つまり、正式な手続きを踏まえられた婚姻であり、公的な

関係である。一方で光源氏と藤壺の関係の場合は私的な関係に過ぎず、その関係は認められたものではない。

また、日本のイニ制度の発達段階、家族や婚姻制度、人々の生活への儒教の浸透レベルといった事項が中国と異なっている点も留意する必要がある。実際に日本の後宮においては、用明天皇の皇后であったものの、崩御後に用明天皇の第一皇子・田目皇子に嫁し、佐富女王を産んだ穴穂部間人皇女の例が記録として残っており、¹¹⁾父の后と結婚する皇子の例がある。一つの歴史事項だけをそのまま『源氏物語』にスライドさせ、そこにとりまく思想と結びつけることは難しいと言わざるを得ない。

つまり、光源氏の密通と「孝」の関係性を典拠や準拠の方面のみから論じることには限界がある。原典に描かれている思想や関係認識を、そのまま『源氏物語』の世界に適用できるとは限らない。今一度、光源氏と藤壺関係を「不孝」とする認識を確認する必要がある。その上で、『源氏物語』の内部の問題として光源氏の「孝」を規定し、「不孝」が語られない構図を具体的に明らかにしていく必要がある。

三 継母・継子の恋愛関係と不孝意識

光源氏と藤壺の密通は、当時の人々にとってどのようなように受け

止められたのであろうか。臣下である光源氏と、后である藤壺の関係という時点で大きなタブーである。しかし、今回問題にしたいのは、物語の読者がこの二人を継母と継子の関係に当てはめて捉え、その関係から「不孝」を想起できていたかという点である。物語の中で藤壺が「継母」と呼称されることはない。継母という関係性においては、胡潔氏の次の指摘が参考となる。

中国の親族用語として、「嫡母」とは妾の子供から見た父の妻のことで、「継母」とは前妻の子供から見た父の継妻のことである。(中略)「ままはは」は本来嫡妻の関係なしに、父の婚姻配偶者を指す言葉である。⁽¹²⁾

藤壺は光源氏の母である桐壺更衣の死後に入内し、後に中宮として桐壺帝の正式な妻として公に認められている。社会的に桐壺帝の配偶者として扱われていると言え、その桐壺帝の子である光源氏との関係においては「継母」にあたることを認めてよいだろう。加えて、後宮の関係とはいえ、光源氏と藤壺が母子関係のように扱われていたことは重要である。桐壺帝は藤壺に対して、

「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、(桐壺)四(四頁)

と、藤壺に対して、光源氏の母代わりとして見立てたい思いを伝えている。この直接的な依頼は単なる口約束ではなく、藤壺の御簾の中に光源氏を入れる態度にも表れている。⁽¹³⁾ 御簾内に入る事ができるのは親族を始めとする限られた人間である。「御簾の内にも例入りたまふ人」(蜻蛉 二一八頁)という表現のように、『源氏物語』は御簾に出入りする人を特別な家族や血縁関係を表すものとして示す。つまり、藤壺の御簾の中への出入りを許したことは、周囲にも母子の関係を知らしめることであった。物語は読み手に、后と臣下の関係と同時に、父の妻と子(継母と継子)の関係とする見方を意識させていると見てよいだろう。

継母と継子の婚姻関係については名例律にて、

不孝。謂。告言詛。言祖父母父母。及祖父母父母在^{ルトキ}。別籍異財。居父母喪。身自嫁娶。若作^レ樂。積服從吉。聞^二

祖父母父母喪¹⁴。匿不¹⁴_二¹⁴_一¹⁴_二¹⁴_一¹⁴_二¹⁴_一¹⁴_二¹⁴_一。詐称¹⁴祖父母父母死¹⁴。姦¹⁴父¹⁴祖妾¹⁴。

と明確に「不孝」の項目として挙げられ、具体的に雑律「姦父祖妻条」にて「凡^補姦^補父祖妻^補者。徒三年。妾減^二一等^一。」とその罪の重さが規定されている。唐律の場合は「絞」の刑であり、日本の方が罪の程度は軽く扱われているという違いはある。また、『史記』「匈奴伝」の記述が注目される。継母との婚姻は、蒙古系の遊牧民族である匈奴や烏丸の風習として存在した。これらの民族では父や兄が死ぬと、子はその配偶者を妻に迎える。この風習は儒教社会からの厳しい目が向けられ、『史記』「匈奴伝」において「匈奴の俗は老を賤しむ¹⁵」例として批判されていた。孝思想から捉えると、継母・継子の婚姻関係は許されざる「不孝」認識がなされていたのである。

ただし、律令の規定は次第に形骸化したものとなっていくことから、物語においても同様の罪として扱われていたとは言い難い。更に、平安時代において「孝」は、儒教と仏教の融合した概念として広く受け入れられている¹⁶。思想とは別の方面から、当時の罪認識について補完していく必要がある。

そこで参照したいのが、文学知識としての「不孝」である。律令規定・経典といった実態的な「不孝」の知識とは別に、文

学世界の中に積み重ねられた「孝」の知識がある。「孝」や「不孝」の例を記す大陸伝来の孝子説話は、日本で多く記録された。これらの話は日本の説話集の中にも所収され、また『令義解』といった注釈書や漢詩や和歌等の中にも取り入れられた。この「孝」の説話から、人々が共有していた「不孝」への認識を取り出すことができるだろう。

まず、伯奇譚に注目したい。「伯奇」は継母が継子である伯奇を迫害する、孝子説話型の継子譚である。この『孝子伝』「伯奇」に代表される伯奇譚は、『漢書』や『後漢書』の史書にも記載され、『白氏文集』等の漢詩においても素材として取り入れられている。また、日本の『注好選』『今昔物語集』といった説話集にも所収され、人々の間で広く共有された孝の知識と言えよう。伯奇譚で継母は伯奇を貶めるために、自分が生んだ子供を殺そうとしていると讒言する。が、父はこれを信じなかったので、伯奇が自分との関係を迫ってくると二度目の讒言に及ぶ。

又讒言すらく、伯奇乃ち我に非法をせんと欲すと。父云わく、吾が子、人と為り慈孝、豈此くの如き事有らむやと。母曰わく、君若し信ぜざれば、伯奇をして後園に向かい菜を取らしめ、君密かに之を窺うべしと。母先ず蜂を賣ちて

衣の袖の中に置く。母、伯奇の辺りに至りて白さく、蜂我を螫すと。即ち地に倒れ、伯奇をして除くことを為さしむ。奇即ち頭を低くして之を捨つ。母即ち還りて吉甫に白さく、君伺い見るや否やと。父因りて之を信じ、乃ち伯奇を呼びて曰わく、汝の父の爲め、上天に慙はず、後母を娶ること此くの如しと。伯奇之を聞き、嘿然として氣無し。

(陽明文庫本「伯奇」⁽¹⁷⁾)

父は伯奇を「慈孝」の人間であると信じて継母の言葉を退けようとするが、蜂を取り除くために伯奇が継母に密着する姿を誤解し、讒言を信じてしまう。伯奇は孝子であるという父の評価が、この誤解された恋愛関係により一気に覆されてしまう。伯奇を呼び出し叱責する際に、父は「天」の語を持ち出し、継母との関係を強く糾弾する。継母との恋愛関係は、天に対して恥ずべき行為だと言うのである。

同様の例は『注好選』「胡楊は鎗を免る 第九十八」にも見られる。この説話の原拠は不明で、他に同話が見つかっていないものであるが、儒教関連の話で構成される上巻に収録されている。

父他行の間に、屏の中に招き取りて語りて云はく、「吾汝

と思ふ事有り。相叶へんや否や」と。胡楊が云はく、「父の為に失有らば、豈天地聴さざらむや」と。□相昵びず。母大きに恥ぢて、刀を以て自らが髪を剪り、手足を損じ、衣装を破る。而して父に語りて云はく、「胡楊吾が爲めに思ふ事有り。今日の所為此の如し」と。時に父大きに忿りて、三人の兵を相副へて之を放つ。(胡楊は鎗を免る 第九十八)⁽¹⁸⁾

胡楊は継母から懸想を断り、これに怒った継母が「胡楊が自分に邪な思いを抱いている。」と讒言する。父はこれに怒り狂い、子の殺害を命じるほどである。この対応からも、如何に継母と継母の恋愛関係が父を裏切る行為であったか読み取ることができよう。加えて、胡楊は継母の懸想を断る言葉の中で「天地」を持ち出している。伯奇譚の例と同様に天地の許しを持ち出す語りであり、継子が継母に恋愛感情を抱くことが、天に背くべき罰せられる不孝の行為として語られている。

継母の継子への懸想は、『うつほ物語』「忠こそ」においても見られる。一条北の方は橘千蔭に思いを寄せるが、なかなか相手にされることがない。そこで、次は千蔭の子である忠こそに懸想し歌を送るが、忠こそはそれに対し、

忠君見て、いとあやしく、かくのたまふは、おとどに悪し
と思はせたてまつらむとにやあらむ、と思ふに、ましてい
とほしかりければ、ただかくなむ

「寄る波のすすぎわたればあやめ草なほ思ふこそ苦し
かりけれ

かしこきことのなからましかば、うれしからまし」と聞こ
えたまへり。(「忠こそ」二二二頁)⁽¹⁹⁾

と丁重に退け、これを契機として迫害が開始される。「忠こそ」
における継母の懸想のパターンはインド起源のクナラ太子譚と
の関連があるとされていたが、基本部分は「伯奇譚」によって
構成されたと三木雅博は指摘する。⁽²⁰⁾「伯奇」の継母と継子の関
係誤解の場面との関係が示唆されている。「忠こそ」は直接的
に関係を「不孝」として提示されてはいない。しかし、「かし
こきこと」のなからましかば」と、忠こそが父の存在を提示して
継母の懸想を退ける点からは、父に顔向けができない関係であ
ると見なす、不孝認識を取り出すことができる。

更に、北の方は迫害の協力者である甥の祐宗を呼び出し、忠
こそが自分に懸想していると吹き込む場面に注目したい。祐宗
は「かくあやしき人の、いかで時めきたまふらむ。なほ見たま
ふるには、こともなき人とこそ見たまへつれ。(「忠こそ」二三

〇頁)」として、理想者として見ていた忠こそその評価を覆し、
激しく批判する。自身の虚栄心を刺激されての言葉ではある
が、北の方の告白を大きな反発へと繋げ、「かくあやしき」と
評する点は見逃せない。継母・継子の恋愛関係は大きく信頼を
失わせる関係であったと言えよう。

『うつほ物語』の例は特に伯奇譚の広まりを伝えるものとし
ても注目される。継母子は危うき道へと繋がるものとして、緊
張の伴う関係としての認識が存在していた。それはこれまで積
み上げてきた信頼を一気になくすような、大きな裏切り、「不
孝」として見られ、共有されたイメージであったと推察され
る。

四 「天」と「孝」

継母と継子の関係に関して、「天」が許さないものという語
られ方がなされていた。ここから「天」と孝の関係について注
目したい。孝が評価されると天によって奇瑞が起こされること
は、孝子説話の一種のパターンとなっている。二つの関わりに
ついては、『孝経』において「夫れ孝は天の経なり。地の誼な
り。民の行ひなり。」(三才章 第八)⁽²¹⁾と示され、「孝」は天
が与えた法則や筋道のことを指し、地で適切とされる道義とし

て説かれた。つまり、人間は天の道筋に従って、孝を実行しなければいけない。この法則・筋道に従った優れたものとして天が評価した結果、孝子説話において奇瑞がもたらされるのである。

それでは「不孝」の場合はどうだろうか。『今昔物語集』の例を参照したい。「古京女為依不孝感現報語 第三十二」では餓えた母が食事を求めるが、不孝の娘がこれを拒否する。その結果、娘が罰により急死してしまう。話末評語にて、

此レハ極テ益無キ事也。母ニ不孝養ズシテ死ヌレバ、後世
 二又惡道ニ墮ム事疑ヒ無シ。飯無クハ、我が分ヲ讓テ、母
 二可令食キニ、我レ夫ト二人食テ母ニ不令食ズシテ死ヌル
 事、此レ、天ノ責ヲ蒙レル也。⁽²²⁾(卷二十、一一六頁)

と、娘の死は「天ノ責」によるもので不孝に対しての報いを受けたのだと説明する。加えて孝をなさずに死んだために、来世にも影響を及ぼすと不孝の罪を厳しく評している。この話は『日本霊異記』上巻の第二四話に収録されているが、「天ノ責」という表現は存在しない。『日本霊異記』でも「凶女の生める母に孝養せずして、以て現に悪死の報を得し縁」の題が付され、不孝に対しての報いという理解はなされていた。『今昔物

語集』の場合は、そこに「天ノ責」という言葉で娘の行為と天の評価を引き付けて、もたらされた死への必然性を強調する語られ方となっている。

不孝者の話は、次の「吉志火磨擬殺母得現報語 第三十三」にも続く。筑前国にて母を養っていた火丸は、故郷に残った妻との再会を望み、母の殺害を計画する。火丸が母の首を切るうとした際に突如地面が割け、火丸は裂け目に落ちていく。ここで母は子の救いを求め、

母此レヲ見、火丸ガ髮ヲ捕テ、天ニ仰テ泣々ク云ク、「我
 ガ子ハ鬼ノ託タル也。此ヲ実ノ心ニ非ズ、願ハ天道、此ノ
 罪ヲ免シ給ヘ」ト叫ブト云ヘドモ、(卷二十、一一八頁)

と、「天道」に語り掛ける。孝の対象である母が許しを訴えるが、子は救済されない。話末評語には「不孝ノ罪ヲ天道新タニ憎給フ事ヲ。」と明記され、孝を判断する天、という認識が表れた一節となっている。この話も『日本霊異記』中巻の第三話に収録され、同様に天を仰ぎ見て許しを請うものの、「天道」の語はない。天と孝の関係性が強調されている。この背景には、『孝経』や孝子説話の広まりが想定されよう。「孝」の評価を天が下すとして、二つを結びつける認識は人々の中で共有さ

れていたと推測される。優れた孝に天が奇瑞を与えると同様に、不孝には天より罰が下されるといふ認識がなされていたのである。

これを受けて、『源氏物語』「薄雲」を考える。要人たちの死が続き、天変地異が起きる様子が描かれ、それが「物のさとし」として政治的な警告であることが示唆される。光源氏は藤壺との関係、冷泉帝の出生の秘密に思い当たっているものの、何かしらの手をうつことができない。その後、夜居の僧都より冷泉帝に秘密が打ち明けられる。

「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終りはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとや思しめさむ」〔薄雲〕四四九頁

夜居の僧都が憚りながらも「天の眼」の存在を口にして、隠されてきた光源氏と藤壺の関係について打ち明ける。「天の眼」という語によって、現状が天による警告に他ならないことを強調し、冷泉帝に告げられた罪との関連性を示している。

「さらに。なにがしと王命婦とより外の人、このことの見しき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこのけなり。いとさなくもの心知ろしめすまじかりつるほどこそはべりつれ。やうやう御齡足りおはしまして、何ごともわきまへさせたまふべき時にいたりて咎をも示すなり。よろづのこと、親の御世よりはじまるにこそはべるなれ。何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてしことを、さらに心より出だしはべりぬること」と、泣く泣く聞こゆるほどに明けはてぬれば、まかでぬ。

上は夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて、いろいろに思し乱れさせたまふ。故院の御ためもうしろめたく、大臣のかくただ人にて世に仕へたまふもあはれにかたじけなかりけること、かたがた思し悩みて、〔薄雲〕四五三頁

更に僧都は冷泉帝の出生の秘密が天変を引き起こしていると明言し、それは天による警告であると示す。咎めは「親の御世よりはじまる」との言葉にあるように、天変は冷泉帝の治世そのものに向けられたものではない。そのはじめは光源氏であり、密通の結果が冷泉帝の誕生である。本人の知らぬところで

罪は引き継がれ、その警告が形として表れたことを自覚させられる。これにより父である光源氏を臣下として扱うことに冷泉帝が苦悩する展開へと続くのだが、加えて桐壺院に思いがはせられている点も注目される。桐壺院に対しての後ろめたさが取り上げられ、裏切りという罪が冷泉帝の中で自覚されている。

桐壺院、光源氏、冷泉帝という三代の関係性が強調され、親から子へ引き継がれていく罪という形で縦の流れが示されている。これは祖先から自分に至る縦の繋がりを基本とする孝の思想との関係を想起させる。ここで「不孝」という語は提示されはしないが、親子間の罪、父に対する扱いが自覚されていくという物語の流れに、前述の天と「孝」の関係性を合わせて考えた時、根底にある不孝の意識を見てよいだろう。

前節から今節にかけて、律令の規定、継母と継子の恋愛関係によって「不孝」として追い詰められていく孝子説話のパターン、天が孝を評価する思想の例を見てきた。これらを照らし合わせる、「薄雲」での一連の乱れは天による警告であり、光源氏の抱える不孝を明らかにするものとして位置付けられよう。光源氏と藤壺の関係に対して天が警告する罪として設定され、一つの転機として語られている。物語の読者は改めて光源氏と藤壺の関係を見つめなおし、桐壺院への裏切りという点に意識を向けることになる。物語の中で、光源氏は内面に不孝を

抱え、それに連なる冷泉帝も罪を引き継ぐ人物として位置付けられていくことになる。

五 不孝の人、光源氏

光源氏が藤壺と関係を持ったことを不孝として位置付けるのならば、やはり繰り返される光源氏の「孝」を理想的孝子の性質として受け取ることはできない。桐壺院の葬送の様子を優れた「孝」として世の人々から評価され、内大臣との比較を通して「孝」が理想化される一方で、その内実には大きな不孝の罪を抱えている。それは皮肉的な語られ方であると言え、經典や孝子説話で語られる「孝」とは一線を画しており、物語独自の「孝」の語られ方がなされている。

光源氏自身は藤壺との関係について、どのように向き合っているのだろうか。二人の関係について「罪」の意識の欠如は既に指摘されている。野村精一氏は物語本文における「つみ」の語彙を検討し、密通事件と罪の関係は極めて薄いと⁽²³⁾、山田清市氏も物語の中で「密通を自覚的に罪という語で受け止めた例は殆んど見当たらない」と述べる。密通そのものを重い罪として結びつける意識は描かれておらず、光源氏自身が「罪」として語るのは藤壺への執着そのものだった。

わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき思しつづけて、〔若紫〕二二一頁)

やがて失せはべりなんも、またこの世ならぬ罪となりはべりぬべきこと〔賢木〕一一二頁)

藤壺との関係で「罪」が使用されているのは、二例のみでいずれも藤壺への執心が話題となっている。光源氏はそれを「恐ろし」いものとして、事の重大さは受け止めている。その上で「生けるかぎり」悩み続けると、この先も続いていくことを想定している。藤壺の関係を受け止め、向かう覚悟を読み取れよう。「賢木」の例では藤壺に迫る光源氏は、執心を残したまま死ぬことこそが罪だと述べ、切実な思いを訴える。積極的に藤壺との関係に向き合っていく思いを表しており、結果的に藤壺の出家の決定打となってしまう。確かにこれらの例からは藤壺との関係を暗いものとして、過去を悔い改めようとする意識は読み取れない。

一方で、今西裕一郎氏は密通に関する反省認識は存在していたとする⁽²⁶⁾。密通の叙述の中で「おほけなし」の表現が頻出し、その表現の中に裏切りに対する畏怖の意識を認める。「おほけなし」は総数二九例のうち、四例が光源氏と藤壺、一二例が柏

木と女三宮に使用されていることから、密通場面に對して意図的な使用がなされていると言えよう。光源氏の「おほけなし」が語られる場に、桐壺院が関与している点から見ても、そこに付随する感情については認めてよい。しかし、それは桐壺院に向かつての感情というより、裏切りに對する後ろめたさという自身に向かう感情であった。光源氏が桐壺院の心情を慮り、そこから罪を自覚して懺悔しようとする思いではない。光源氏が自身の行為を過ちであったと否定する認識は描かれていないと読み取ってよいだろう。

密通に對する光源氏の心情が最も表れているのは、誕生した冷泉帝が参内する場面である。桐壺帝に顔立ちの類似を指摘された光源氏は、

中将の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。物語などして、うち笑みたまへるがいとゆゆしうつくしきに、わが身ながらこれに似たらむは、いみじういたはしうおほえたまふぞあながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおほしける。〔紅葉賀〕三二九頁)

と、恐怖、畏懼、歓喜といった様々な心情で心乱れる。恐怖は裏切りへの後ろめたさに通じるものであるが、その一方で喜びという正反対の感情もかみしめている。喜びの感情を抱く余裕を持つていることから、光源氏の抱く恐怖は後悔や絶望が伴うような深いものではない。むしろ自身が子を守らなければ、という前向きさも見えるほどである。光源氏はあくまでも藤壺との関係を受け止め、前に進んでいこうとする覚悟をみせる。立ち止まる様子を見せず、自身の使命と解釈する。その様子を語り手は「あながち」と批判する。身勝手さが伴うものとして示されているのである。この場合もやはり、父に対して罪を懺悔するような思いではなく、桐壺院の心情に光源氏が寄り添うことはない。「薄雲」で藤壺と光源氏の関係について知った冷泉帝が桐壺院の心中に思いをはせているのに対し、光源氏は自身の心としか対話ができていない異様さがある。

光源氏が父の心情について思いやるのは、女三の宮の密通を把握してしまった時である。

故院の上も、かく、御心には知らしめしてや、知らず顔を
つくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと
恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、
恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。「若菜下」二二

五五頁)

この時に初めて、父が全てを把握していたのではないかと、桐壺院の心情に思いをはせる。その上で「あるまじき過ち」として、自身の行動を振り返り認識する。ここで光源氏はようやく立ち止まり、父の心と向き合う。それは関係を悔いる心情を見せなかった前述の場面とは一変した態度であった。同じ立場となり、初めて自身の行動を思考し、密通を非難できないことに気づく。父の心情を置き去りにし、自身の感情のままに突き進んだ光源氏の身勝手さを突きつけるような物語の運びとなっている。

前述したように光源氏は父の葬送、「滯標」の法華八講の儀礼と、世間からは父に孝を尽くす人物として称賛されている。ここで光源氏が内大臣の不孝を批判する様を振り返りたい。

まめやかに仕うまつり見えたてまつれ。内大臣はこまかに
しもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはな
やかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめ
しきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、ま
ことにしみて深きところはなき人になむものせられける。
〔野分〕二七二頁)

内大臣の親に対する態度は外面的なものばかりで、儀礼面は華やかに力を入れるという。一方で親に対する内実の寄り添いはないとして、「過ぎにし方の孝なかりし」（『藤裏葉』四三五頁）とそれは「孝」ではないと光源氏は評する。これは、まさしく光源氏の桐壺院への対応に返ってくる言葉ではないだろうか。儀礼面に力を入れ外に発信することで、世の中の人々は光源氏を孝子として理想化する。だが、実際のところ光源氏は、藤壺との関係という不孝を内に抱えながらも、立ち止まることなく自身の道突き進む。裏切りへの後ろめたさを感じつつも、父の心情に寄り添い思いを交わすことはない。それは双方向的に繋がった親子関係とは言えないだろう。光源氏の内大臣評価は、まさに自分を映し出す鏡のようになっていく。

物語が光源氏の「孝」を称賛する様を描くことは、内実の空虚さ、抱えている不孝を照射することに繋がる。「孝」の語は、光源氏の桐壺院との関係におけるズレ、外面と内面のズレに対する読者のまなざしを誘導させるものとして機能していると言えるだろう。

六 おわりに

律令の規定・説話や物語の記述から、継母と継子の恋愛関係

は「不孝」を連想させ、人々が共有するイメージとなっていたことが想定される。『源氏物語』で光源氏は「孝」の人物として称賛され、内大臣の「不孝」を批判する側として描かれている。しかし、「薄雲」の天変で示されるように、物語においては内面に不孝を抱える存在として位置付けられている。理想的に語られている「孝」は、そのような内面に抱える不孝を照射し、光源氏のズレへと意識を向けさせる。

それは孝子説話や經典での「孝」の提示とは異なっている、物語独自の方法として見出すことができよう。本来の思想的な「孝」の語に付随した権威性・強制力を根底に据えて、『源氏物語』では親子の心の距離を皮肉的に演出する方法のもとに「孝」を機能させていた。一見すると光源氏を理想化するような「孝」の語においても、この延長に位置付けることができ。思想を離れた独自の「孝」のあり方、つまり、物語の「孝」のあり方の一つとして見出すことができるだろう。

【付記】 本稿は二〇一九年八月二〇日に開催された、同志社大学人文科学研究所第二〇期第三研究会（代表…福田智子「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」「夏の全体集会」において発表した「光源氏と孝」提示されない「不孝」―を論文にまとめたものである。

注

- (1) 白川静『白川静著作集別巻 説文新義 巻四』(平凡社 二〇〇二年)
- (2) 物語の「孝」の例として、『落窪物語』で「孝」は女君の居場所を取り戻すものとして機能し(拙稿『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―)『国語と国文学 九三巻一―二号』二〇一六年二月、『うつほ物語』においては双方向的な親子の絆である「親子の愛しさ」が「孝」と結びつけられ物語が構成されている(山本登朗「親と子―宇津保物語の方法―」『森重先生喜寿記念ことばとことば』刊行会編『ことばとことば』和泉書院 一九九九年)。
- (3) 拙稿『源氏物語』における「孝」の方法―「孝」の用例を起点として―(『国語国文 八八巻七号』二〇一九年七月)において『源氏物語』で「孝」は親子関係における心のズレを印象づける語として機能していることを指摘した。
- (4) うち、内大臣と光源氏の両方に関わる例は三例ある。なお、『源氏物語』の「孝」の全用例の検討は、注三の拙稿において行っている。
- (5) 以下、『源氏物語』の引用は全て、阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(小学館 一九九四―一九九八年)による。
- (6) 『孝経』「第一 開宗明義章」では、「身体髮膚、之を父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顕はすは、孝の終りなり。夫れ孝は親に事ふるに始まり、君に事ふるに中し、身を立つるに終る。大雅に云ふ、爾の祖を念ふこと亡からんや。その徳を律べ修む、と。」(栗原圭介『新釈漢文大系 孝経』明治書院 一九八六年)と、自身と父母、そして祖先との繋がりを示し、宗族の繁栄を志すことを「孝」としての最終目標として説く。
- (7) 『河海抄』「秦始皇は莊襄王の子として位に即といへとも実は始皇の母太后嫪毐呂不韋といふ臣下に密通して所生云々見史記伝」、『紫明抄』「秦始皇は、莊襄王の子として位につき給へりしかと、実は始皇の母夏后に呂不韋といひし臣下ほのかにまいりてうませたてまつりし子也史記伝」(玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』角川書店 一九六八年)、『紫明抄』では始皇帝の母は夏太后となっているが、夏太后は祖母であり、密通が記録されている太后(通称は趙姬)とは別人である。
- (8) 今井源衛『漢籍・史書・仏典引用一覽』(『新編日本古典文学全集 源氏物語②』小学館 一九九五年)
- (9) 郭潔梅『源氏物語』桐壺巻と唐の歴史―桐壺巻の後半にみえる「父帝の寵愛」をめぐって―(『和漢比較文学 第二九号』二〇〇二年八月)
- (10) 趙秀全「光源氏における「孝」と密通」(河添房江編『古代文学の時空』翰林書房 二〇一三年)
- (11) 『聖德太子平氏伝雜勘文』下ノ三「大宮太子御子孫並妃等事」所引にある「上宮記」逸文に「多米王 父八用明 母ハ蘇我女也。父天皇崩後。娶庶母間人孔部王生兒。佐富女王。一也。」(仏書刊行会編『大日本仏教全書』一二 聖德太

- 子伝叢書』名著普及会 一九七九年」とある。
- (12) 胡潔『律令制度と日本古代の婚姻・家族に関する研究』(風間書房 二〇一六年)
- (13) 「大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず、」(『桐壺』四九頁) から、元服前は藤壺の御簾内に入入りしていたことが語られている。
- (14) 黒板勝美編『新訂増補普及版 国史大系 律』(吉川弘文館 一九七四年)
- (15) 青木五郎『新釈漢文大系 史記十二』(明治書院 二〇〇四年)
- (16) 拙稿『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―(『国語と国文学九三卷一二号』二〇一六年二月) にもても言及している。
- (17) 幼学の会『孝子伝注解』(汲古書院 二〇〇三年)
- (18) 馬淵和夫、小泉弘、今野達校注『新日本古典文学大系 三 宝絵 注好選』(岩波書店 一九九七年)
- (19) 『うつほ物語』の引用は中野幸一編『新編日本古典文学全集 うつほ物語①』(小学館 一九九九年) による。
- (20) 三木雅博『うつほ物語 忠こそその(継子いじめ譚)の位相―孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から―(『国語国文 七三卷一号』二〇〇四年一月)
- (21) 栗原圭介『新釈漢文大系 孝経』(明治書院 一九八六年)
- (22) 『今昔物語集』の引用は馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『新編日本古典文学全集 今昔物語集③』(小学館 二〇〇一年) による。
- (23) 野村精一「藤壺の「つみ」について」(『源氏物語の創造』桜楓社 一九六九年)
- (24) 山田清市「源氏物語に表われた罪の意識」(『国文学―解釈と教材の研究― 三卷五号』一九五八年四月)
- (25) 今西祐一郎「罪意識の基底―源氏物語の密通をめぐって」(『国語と国文学 五〇巻五号』一九七三年五月)